

幻のラン「タブガワヤツシロラン」の発見 —屋久島原生林の豊かさを象徴—

2015年4月、屋久島在住の写真家である山下大明氏は、鹿児島県熊毛郡屋久島町東部の愛子岳楠川流域と女川流域の低地照葉樹林で、日本では知られていなかったラン科植物を発見しました。この知らせを受けた末次京都大学白眉センター特定助教は、山下大明氏と屋久島学ソサエティ副会長の手塚賢至氏とともに現地調査を行いました。その後、標本を精査した結果、この植物はラン科のオニノヤガラ属に属し、これまで台湾の一部地域でしか発見されていなかった“*Gastrodia uraiensis*”であることがわかりました。和名は、発見場所の「楠川（タブガワ）」を冠し、「タブガワヤツシロラン」と名づけられました。本研究成果は、10月31日発行の日本植物分類学会英文誌「*Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*」に掲載されました。

研究者からのコメント

屋久島の低地照葉樹林で、日本ではこれまで見つかっていなかったラン科植物「タブガワヤツシロラン」が発見されました。このランは、光合成ができず菌類に寄生するため、菌類が豊富な原生林でなければ生育することができないと考えられます。)つまりこの植物は、目には見えない菌類の豊穡なネットワークが息づいている証拠で、屋久島の原生林の豊かさを象徴であるといえます。

屋久島が大自然に包まれた島であることは、皆さんご存知のとおりですが、低地の照葉樹林の価値はまだまだ正しく認識されているとはいえません。事実、発見場所に隣接するスギ植林地は伐採されており、環境の変化も懸念されます。豊かな森とそこに棲む菌類に支えられた「タブガワヤツシロラン」の発見は、屋久島の低地照葉樹林の貴重さを再認識させるものです。

研究の概要

植物の中にはその最たる特徴である光合成をやめ、菌類に寄生して一方的に栄養を搾取するもの、すなわち菌従属栄養植物が存在します。菌従属栄養植物は光合成を行わないため、花期と果実期にしか地上に姿を現しません。また花期が短く、サイズも小さいものが多いため、見つけることが非常に困難です。これらの要因から、植物の調査研究が比較的進んでいる日本においても、菌従属栄養植物の正確な分布情報についてはあまり解明が進んでいないのが現状です。そこで末次特定助教は、日本国内における菌従属栄養植物の分布情報の整理に取り組んでいます。

2015年4月、屋久島在住の写真家である山下大明氏は、鹿児島県熊毛郡屋久島町東部の愛子岳楯川流域と女川流域の低地照葉樹林で、日本では全く知られていなかったラン科植物を発見しました。この知らせを受けた末次特定助教は、山下大明氏と屋久島学ソサエティ副会長の手塚賢至氏とともに現地調査を行いました。その調査で得られた標本を精査した結果、この植物は、ラン科のオニノヤガラ属に属し、これまで台湾の一部地域でしか発見されていなかった“*Gastrodia uraiensis*”であることがわかりました。和名は、発見場所の「楯川（タブガワ）」を冠し、発見者である山下大明氏が「タブガワヤツシロラン」と命名しました。

今回の発見は、屋久島の原生林の豊かさを象徴するものですが、一般的に屋久島の大自然というと、標高 500 メートルを超える場所でみられる縄文杉などに主な関心が払われ、それに比べ低地の照葉樹林とその価値は広く認知されているとはいえません。例えば、今回発見された場所のうち一か所は、国立公園の特別地域にも、世界遺産の登録地域にも指定されておらず、森林の伐採が可能な区域となっています。実際にスギ植林地の伐採が行われている場所もあり、そこでは乾燥による菌類相の変化など環境の悪化も懸念されます。かつては、南方熊楠も、シロシヤクジョウ、ヒナノシヤクジョウ、ホンゴウソウといった光合成をやめた植物が生える場所こそ森の聖域であると述べ、その環境の貴さを訴えました。豊かな森とそこに棲む菌類に支えられた「タブガワヤツシロラン」の発見は、屋久島の低地照葉樹林の重要性を改めて示すものです。



屋久島で発見された日本新産のラン科植物「タブガワヤツシロラン」

書誌情報

Suetsugu K (2015) First record of the mycoheterotrophic orchid *Gastrodia uraiensis* (Orchidaceae) from Yakushima Island, Japan. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, 66: 193-196.

<用語解説>

菌従属栄養植物

光合成能力を失い、菌根菌や腐朽菌から養分を奪うようになった植物のこと。ツツジ科、ヒメハギ科、リンドウ科、ヒナノシヤクジョウ科、コルシア科、ユリ科、ラン科、サクライソウ科、ホンゴウソウ科などに該当する種が存在し、これまで日本からは約 50 種が報告されている。